

善右衛門さん

菅 邦男

アメリカとの戦争が終わって、十数年たったころのこと。

宮崎市からバスで一時間ほどいった本庄という町に、原田善右衛門という人が住んでいた。

善右衛門さんは、稲荷神社のとなりで、奥さんとふたり、雑貨屋をやっていた。たばこも売っていたので、町の人みんな、善右衛門さんの店を「たばこ屋」と呼んでいた。

あるとき、たばこ屋の前に、きみような看板がたった。

『テレビジョン、一回一〇円』

子どもたちは、それを見てびつくりした。

「おい、テレビジョンだつてよ」

「テレビジョンって、なんね？」

「おまえ、テレビジョン、知らんとか。テレビよ」

「テレビ？ 知っちよる。ラジオみたいなやつやろ」

「ちがう。テレビって、絵がみえるんやぞ」

「じゃ、映画？」

「映画じゃねえけど、そんなもんかな。箱の中にうつるんだって」

この町にはまだ、テレビのある家なんて一軒もなかった。そのテレビがたばこ屋にきたのだ。だれだつてみたくてたまらない。でも、一回一〇円は高い。一〇円といえば、いちごのかき氷が食べられる。あんパンだつて買える。日曜日に、子ども映画にだつていける。

そこで子どもたちは、幸生を偵察にだすことにした。幸生は善右衛門さんの甥っ子なのだ。幸生は善右衛門さんの家に入つていった。ところが、いつこうにもどつてこない。

「幸生のヤツ、なにしちよるちやろ。ひろし、おまえいつてみてこい」

「いちばん年上の忠が命令した。」

ひろしが店の端のうす暗い土間に入つていくと、幸生が立っていた。

「なにしちよると」

ひろしが小声で幸生に話しかける。

「テレビ、相撲をやつちよる」

幸生も小声で答える。

みると、奥の部屋に、テレビがこちら向きに置いてある。足のついた台の上ののっけて、古ぼけた家の中で、そこだけがかがやくように明るい。白黒の画面には、相撲とりがふたり、向かい合っている。ひとりはニュース映画でみたことがある、大関二ツ山だ。

「お、すげえ」

思わず声をだすと、善右衛門さんがこちらをふり返った。手には、本庄名物「白玉まんじゅう」を持つている。幸生とひろしは顔を見あわせた。おいしいのだ、白玉まんじゅうは。でも、幸生もひろしも、お盆のときぐらいにしか食べたことがない。

「こら、おまえたちや、一〇円持ってきたか。持ってこんと、みられんど」

「一〇円も、持つちよらん。高いがね。一〇円は」

幸生が、ごくりとつばを飲みこみながらいうと、

「おまえは親戚じゃかい、まあ、いいが、ひろしはいかん。一〇円じゃ。テレビは値段が高けえちやかいね、ただじゃ、みせられん。うちは貧乏じゃけん、一〇円はもらわんと引きあわらん」

「そんなら、みらん」

ひろしが泣きそうな顔をしていった。幸生も、

「おれも、みらん」

といったが、ひろしがでていったあとも、横目でテレビの二ツ山をみていた。

制限時間いっぱい。二ツ山が立つと、すぐに相手を上手投げで転がしてしまった。それを見ると、幸生は走って外へでた。

みんなの視線が幸生に集まった。

「おまえばかり、テレビをみて」

ひろしがいったが、

「二ツ山が勝った」

と、報告すると、みんなはどうやって勝ったか、聞きたがった。

「上手投げで、あつというまに勝つた」

「大鵬たいほうは？」

「大鵬は知らん。二ツ山ふたつやましかみらんかったもん」

「みてえなあ。だれか、一〇円持ってないか。持ってるわけねえよな。おれ、五円ならあるんやけどなあ」

「おれ、三円なら持つちよる」

幸生さちおがいう。

「おれ、二円」

「おれ、一円しかない」

「よし。たせばなんとかなるな。じゃあ、あした、こづかいもらったら、神社に集まろう」

つぎの日、学校から帰ると、みんなはすぐに神社の境内けいだいに集まった。持ってきたこづかいを合わせると一八円になったので、小さい子にはお金を返した。そのかわり、みるのはあとまわし、まず、幸生さちおと忠ただしが入っていった。

「おじさん、一〇円持ってきた。おれはただでよいやろう」

幸生さちおがいうと、

「おお。まあ、いいやろう。忠ただし、十円はその箱に入れとけ」

善右衛門ぜんえもんさんはそういいながら、かたすみの箱を指さした。箱には、『テレビジョン拝見はいけん料りょう』と書いてあった。

テレビでは、ちようど小結こむすびの前田川まえだがわが土俵どひょうにあがったところだった。幸生も忠もわくわくしながらみつめていた。相手は、背せの高い人気力士、西にしの谷たに。つり出しが得意とくいで、人間クレーンとあだ名がついている。時間いっばい、ふたりは立ちあがると、はげしく突つ張ばり合あった。そのうち、西の谷は機をみて四つに組むと、前田川を高々とつりあげた。そして俵たわらまで運んでいくと、土俵の外ほうに放なり投なげた。

幸生も忠も、それに善右衛門さんまでが、「わあ」と歓声かんせいをあげた。西の谷は、つり出しで勝ったのだ。きようまで全勝。二ツ山ふたつやま、大鵬たいほうと三人が全勝なのだ。ほかの小結せきわけや関脇せきわが登場して、いよいよこれも人気の大関大鵬おおせきの登場。ふたりがむちゆうでみていると、うしろで背せなか中なかをつつく者がいる。

ふり返ると、ひろしが立っていて、

「こうたい、こうたい」

と、小声でいつている。

「もうちよつと、待て」

忠がいらだたしそうにいった。

「待つちよつたら、相撲が終わるやろが」

「そんなら、そこでわからんようにみとけ」

三人がむちゆうで大鵬の取り組みをみてみると、いつのまにか、うしろにほかの子どもたちもやってきた。小さい子は座敷のあがり口のところにあごをのせてみている。善右衛門さんは、相撲に氣をとられて氣がつかない。大鵬が勝ち、二ツ山が登場すると、忠がふり返って、口に指をたてにあてた。「静かにしてろ」という意味だ。

やがて二ツ山の対戦がはじまった。相手は丸まると太った朝の山。がっちりした体の二ツ山は、立ちあがると、一直線に朝の山を寄り切った。子どもたちは、いっせいに歓声をあげて、拍手した。

善右衛門さんがふり返る。みんな、いちもくさんににげだした。

つぎの日、善右衛門さんは幸生にいった。

「あいつらには、もうテレビはみせん。一〇円でなん人もみちよるじやねか」

それを聞いて、子どもたちはどうしたらいいか相談した。幸生はよいことを思いついた。店の入口に、大きな鏡がかけてある。幸生の背だけの半分くらいはある。宣伝用の鏡で、下のほうに、帽子をかぶったナポレオンの絵が描いてある。あれを使おう。

「あんね、たばこ屋の裏に井戸があるやろ。柿の木の下に。あそこらへんにかくれといて。みえるようにするから。みえたら手で合図して」

幸生は店の奥までいくと、そつと裏口の引き戸を開けておいた。みんなが裏の畑を通つて、井戸までやつてくる。幸生は入り口まで引き返すと、音がしないように、鏡をはずしはじめた。下の端を持つて、ゆつくり持ちあげる。なかなかはずれない。と思つたら、はずれたひょうしに、ふらついて、うしろにあつたたばこケースにいやというほど背中をぶつつけてしまった。「ガチャン」と音がした。

ドキツとして奥をみたが、善右衛門さんはテレビの音が大きいのか、気がつかなかったらしい。ほつとして、鏡をだきかかえ、そのまま横歩きに歩く。が、重たいのでときどき引きずつてしまう。そのたびにヒヤリとして立ち止まる。ようやく裏口まで運び、そこにあつた丸い樽の上に立てかけた。もちろんテレビのほうに向けてだ。そつと外をみると、忠が手を左右にふっている。みえないのだ。幸生は音がしないように用心しながら、鏡を少し外側へ向けた。忠が手をあげてOKの合図をだしている。

こうして、うまい具合にテレビがみられることになったはずだった。ところが、どうしたことか、しばらくすると、みんな井戸から裏口まできて、首をだしてのぞいている。遠くてよくみえなかつたらしい。

幸生が「しつ、しつ」と手で合図すると首を引っこめるが、またしばらくすると首をだす。

こんどはそつと中まで首をつっこみ、耳に手をあてて、鏡ではなく、本物のテレビのほうをみている。「なんだ、音が聞こえないのか」と幸生も気がついたが、どうしようもない。「それくらい、がまんしろよ」と手で合図したが、うしろの子どもたちは、聞こえないうえにみえないものだから、とうとう背をかがめて中まで入ってきてしまった。

そこへおばさんが外から帰ってきた。

「あらら、あんたたち、なにしちよるとね。こんなところに鏡かがみを持ちだして」
もちろん子どもたちは、もうそこにはいなかった。

つぎの日、みんなは境内けいだいに集まった。もうすぐ千秋楽せんしゅうらく。みんなはきょうも稲荷神社いなりじんじやの境内けいだいに集まった。二ツ山ふたつやまは、まだ全勝たいほう。大鵬たいほうと西にしの谷たには一敗。大鵬と西の谷が勝つて二つ山が負ければ、千秋楽で三つどもえの優勝決定戦だ。

集まってはみたものの、名案がうかばない。上のお社やしろにつづく石段いしだんに腰こしかけて、みんなだまつている。石段の横には、神社に寄付きふをした人の名前を書いた大きな板が立てられていた。寄付したお金が多い人の名前は大きく、少ない人は小さく書いてある。と、ぼんやりそれを見ている忠ただしが、とつぜんいった。

「ひろし、かんなを持つてこい」

ひろしが家からかんなを持つてくると、忠はいちばん上の名前を指さした。

そこにはどれよりも大きく、

「原田善右衛門殿 金一〇〇〇円」

と、書いてあった。

「一〇〇〇円やぞ。幸生のおじさんは金持ちやな」

忠がいう。

「一〇〇〇円って、どのくらい？」

幸生が聞き返すと、

「どのくらいって、一〇〇〇円あったらなんでも買える。飛行機にも乗れる」

「ひこうき？ わあ、すげえなあ」

「幸生のおじさんは名前がぜんえもんやかいね。金持ちのはずよ」

「ぜんえもんだつたら、どうして金持ちなんだよ」

「ばかやな、おまえ。ぜんって、ぜにのことやろう。お金のことを銭っていうやろうが。ぜん

えもんは、銭えもんじゃねか」

「ふうん。よう、わからん」

「まあ、いいよ。いいか、みてろ」

忠ただしはいいながら、かんなどで名札なふだの○を二つ、けずりとつてしまった。

「な、これで一〇円。テレビ代といっしょや」

「よこにテレビ代と書いとこか」

これで善右衛門ぜんえもんさんの寄付きふは、テレビ代一〇円になってしまった。

それからたばこ屋たばこやにいつて、看板かんばん『テレビジョン、一回一〇円』の円の前に、万を書き入れた。テレビ代は一〇万円になった。そして、みんなそろって、

「テレビ一回一〇万円、善右衛門の寄付は、たったの一〇円」

と、はやしたてながら、店の前をいつたりきたり行進した。つぎの日も、つぎの日も。学校にいくときも、学校からの帰りにも。

大人たちは、みな笑わらいながらみていた。テレビを買えない大人たちは、新し物好きずの善右衛門さんが、あまりこころよくは思えなかったのだ。

とうとう善右衛門さんはたまりかねて、テレビを店の入り口に持ってきた。買い物にきた人は、だれでもみられるようにしたのだ。だが、子どもたちはお客ではないので、店の中で立ってみているわけにはいかなかった。

子どもたちは、またもや境内けいだいに集あまつて考かんえた。でも、これはすぐかいけつに解かい決けつした。

幸生さちおの家は、せまい道路をはさんで、善右衛門ぜんえもんさんの家のまん前まへにあつた。そこで、幸生の家の前に縁台えんたいやら椅子いすやらならべて、そこから道路みちごしにテレビをみたのだ。これには善右衛門さんも文句もんくをいうわけにはいかなかった。よくみえるように、縁台が少しずつ道路のまん中にでていったのは、いうまでもない。せまい道路だし、自動車などめつたに通りはしなかつたのだ。

それから数年後、日本で初めてのオリンピックが開あかれた昭和三十九年。世界じゅうから選手せんしゅが集あまり、戦争せんそうに負まけた日本が、ようやく世界に復活ふっかつしたことを示しす大会たいかいだつた。オリンピックをみようとして、国じゅうの人があつてテレビを買かつた。幸生も、ひろしも忠ただしも、みんなそれぞれの家で、オリンピックをみたのだつた。白黒テレビではあつたけれども。

善右衛門さんは？ もちろんカラーテレビだつた。